国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第13号 (2002年10月1日発行)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001948

国語研の窓 13号

平成14年10月1日　第13号　発行　独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution :The National Institute for Japanese Language

編集　国立国語研究所普及広報委員会
「国語研の窓」部会
〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14
電話03-3900-3111 FAX03-3906-3530
URL http://www.kokken.go.jp/

もくじ

暮らしに生きることば　1
最近の仕事から　2
解説：地図で見る方言の表現法　4
刊行物紹介：「日本語教育ブックレット」　5
ことばQ＆A　6
開催案内・開催記録　6
報告：「ことば」フォーラムin熊本　7
新　刊　7
お知らせ（公開研究発表会，「ことば」フォーラムほか）　8

暮らしに生きることば

情報を残す

みなさんは，「アーカイブズ」という言葉を聞いたことがありますか？

アーカイブズ（archives）とは，組織や個人が作成した文書や記録を取捨選択し，将来も利用できるように整理・保存しているもののことです。保存のための施設もアーカイブズと言います。

身近なところでは，自治体の「文書館」や「公文書館」が役所のアーカイブズ施設で，そこに収蔵されているのがアーカイブズ資料です。国語研究所のある東京都にも，保存年限が過ぎた都庁の公文書を保存する「東京都公文書館」があります。

「アーカイブズ」というと，横文字なので，いかにも外国から入ってきた考え方のように思われるかもしれません。しかし，組織や個人が活動を行った記録を将来の参考のために残したいと思う気持ちには，古今東西，変わりはありません。古いものとしてはメソポタミアのアーカイブズが知られていますが，日本も文書の残存量では世界有数です。これは，幕府であれ名主の家であれ，仕事の際に作られた文書を大切に保存し，仕事の内容を伝えていくという伝統があったからです。

アーカイブズ資料は，長いこと「紙に文字が書かれたもの」がほとんどでした。紙の資料は，一目で中身が分かり，整理するのも容易です。けれども，現代は，写真や録音・録画資料，そしてコンピュータで作成されるデジタル文書といった，紙以外の資料が大量に作成される時代です。アーカイブズの研究では，こうした新しい形の資料をどのように整理・保存すれば，将来にわたって使いやすくできるかということが重要な課題になっています。

国語研究所にも，生きた「ことば」の記録がたくさん残されていますが，その形は多種多様です。アーカイブズ研究の成果を活用しつつ，その保存をはかっていきたいと思っています。

（森本　祥子）

最近の仕事から

1．大学院「日本語教育指導者養成プログラム」への参画

○日本語教育指導者養成プログラム

海外では日本社会や日本文化についての関心が高まり，日本語を学習しようとする人たちも世界で210万人を超える勢いです。こうした日本語学習の需要に応えるためには，世界の各国で日本語を教える教師がたくさん必要です。また，それと同時に，それぞれの国や地域での日本語教育の中核を担うことのできる教師の育成も求められています。

国立国語研究所では，海外のこのような需要に応えるべく，政策研究大学院大学（新宿区），国際交流基金日本語国際センター（さいたま市）と共同で，平成13年10月に，「日本語教育指導者養成プログラム」という新しい大学院課程（修士課程）を開設しました。

○大学院生は

平成13年度は，ODA（政府開発援助）の対象国である６か国（インドネシア・タイ・フィリピン・マレーシア・インド・ブラジル）から８名の院生を迎え，昨年10月の秋学期から指導を始めました。

これらの大学院生は，すでにそれぞれの母国で，大学や日本語教育機関の教師などとして活躍している人たちです。帰国したあとも引き続き，母国の日本語教育をリードしていくことが期待されていますから，それぞれの国や大学での日本語教育が抱えている課題を研究テーマに選んで，指導を受けたり，調査や実習にあたったりしています。

○１年間で修了を目指して

大学院生の講義・演習・研究指導などは，３機関の教官や研究員が協力して行っています。国語研究所員も，９名が日本語学や言語学の講義，日本語教育の方法論や教師教育論，教材や教育情報の演習などを行っています。

通常の修士課程は２年間ですが，このプログラムでは１年間に集中したカリキュラムを用意して修士学位の取得を目指します。１年間を４学期に分け，夏や冬の休みも短くして，みっちりと研究や実習を進めてきています。

平成14年９月には，第１期生が１年のコースを修了し，それぞれの掲げた「特定課題研究」について最終レポートや論文をまとめ，修了試験を経て巣立っていきました。

また，10月には新たに９名の第２期生を迎えることになっています。国語研究所では，修士課程を今後とも充実させるとともに，これに続く博士課程を開設することを目指しています。また，現在はODA対象国のみから学生を募集していますが，将来的には，それ以外の国や地域（日本を含む）からも学生の募集を行うことが検討されています。

（杉戸 清樹）

2．「国立国語研究所『外来語』委員会」の設置

カタカナやローマ字で書かれた外来語・外国語が，以前にも増して激しい勢いで私たちの日常生活の中に入り込んでいるという印象があります。本号の「ことばＱ＆Ａ」にも，「このままでは本来の日本語がなくなってしまうのではないかと心配だ」という質問が寄せられています（６ページをご覧下さい）。

日本語の行方については，「ことばＱ＆Ａ」の解説に譲りますが，日本語でコミュニケーションを行っている私たちにとって何よりも困ることは，なじみのない，分かりにくい外来語が日常的に身辺を飛び交っていることです。とりわけ，官公庁の公的な文書や，多くの人を対象とする新聞・放送などに，このような外来語が含まれているのは，問題と言わざるをえないでしょう。

国立国語研究所では，このような現状を改善する方法を探り，望ましい対応策を具体的に提案するための「外来語」委員会を設置しました。次ページは，この委員会の設立趣意書の全文です。

（相澤 正夫）

国立国語研究所「外来語」委員会 設立趣意書

この委員会は，分かりにくい「外来語」について言葉遣いを工夫し提案することを目的としています。

○「外来語」の問題点

近年，片仮名やローマ字で書かれた目新しい外来語・外国語が，公的な役割を担う官庁の白書や広報誌，また，日々の生活と切り離すことのできない新聞・雑誌・テレビなどで数多く使われていると指摘されています。例えば，高齢者の介護や福祉に関する広報誌の記事は，読み手であるお年寄りに配慮した表現を用いることが，本来何よりも大切にされなければならないはずです。多くの人を対象とする新聞・放送等においても，一般になじみの薄い専門用語を不用意に使わないよう十分に注意する必要があります。ところが，外来語・外国語の使用状況を見ると，読み手の分かりやすさに対する配慮よりも，書き手の使いやすさを優先しているように見受けられることがしばしばあります。

○伝え合いとしての言葉を

そもそも，どんな言葉を使うのが適切かということは，話し手・書き手の意図，想定される聞き手・読み手，話題，使われる環境など，その時々のさまざまな条件によって変わります。同じ内容の話をするにしても，大人に話すときと子供に話すときとでは，使う単語，声の調子，話す速さ，文の長さなどが変わってきて当然です。また，同じ大人でも，相手がその話題に通じているかどうかによって，言葉選びや言葉遣いに自ずと違いが出てきます。相手や場面に応じて，適切な言葉遣いが変わることにいつも留意することが大切です。このことは，私達の言葉について国語審議会がかねて提言してきた「平明で，的確で，美しく，豊かであること」を実現する具体的な努力の一つと考えます。

○分かりやすい言葉を求めて

外来語には，これまで日本になかった事物や思考を表現する言葉として，日本語をより豊かにするという優れた面もあります。しかしその一方で，むやみに多用すると円滑な伝え合いの障害となる面も出てきます。とりわけ官庁・報道機関など公共性の強い組織が，なじみの薄い外来語を不特定多数の人に向けて使用するとき，そこにさまざまな支障が生じることになります。これらの組織ではそうした事態を招かないよう，それぞれの指針に基づいて言い換えや注釈などの工夫を施した上で外来語を使用することが大切です。それと同時に，その指針や工夫を公共の財産として共有する方向に進んでいくことが望ましいとも考えます。

○委員会の目指すところ

以上のような認識に立って，この委員会では，まず国の省庁の行政白書を，その後は新聞や雑誌など公共性の強いものを対象として，一般に分かりにくい外来語が使われていないか，使われていればそれに換えるべき分かりやすい言葉や表現としてどんなものがあるか検討します。そして，それに基づいて個々の外来語に対する考え方やその言い換え例を含めた，緩やかな目安・よりどころを具体的に提案することを目指しています。この委員会の提案がきっかけとなり，より多くの人々がそれぞれの立場で，私達の大切な日本語について考えていく機会が生まれることになれば幸いです。

「外来語」に関するみなさまの御意見をお寄せください。

（1）電子メール　gairaigo@kokken.go.jp　（さしつかえなければ，年齢と性別をお書き添えください。）

（2）電　話　　03-3900-3320　（案内にしたがって御意見を録音してください。）

（受付時間：月曜日～金曜日（祝祭日を除く）の10:00～16:00。）

お寄せいただいた御意見に個々にお答えすることはできませんが，国立国語研究所において蓄積し，「外来語」委員会や外来語等の調査研究に生かしていきます。

御意見の全部あるいは一部を調査研究報告・資料等の中で採録させていただく場合がありますが，その際，氏名，電子メールのアドレスなどの個人情報は公表いたしません。

電話では，「外来語」に関する御質問も受け付けております。電話番号と受付時間は上と同じです。

（ホームページにも同様の案内が掲載されています。http://www.kokken.go.jp/public/gairaigo/gairaigo.html）

解　説

地図で見る方言の表現法―『方言文法全国地図』第５集より―

『方言文法全国地図』第５集が刊行されました（財務省印刷局刊）。たとえば，義務表現と呼ばれる「～しなければならない」を全国でどのように言うかを図のように見ることができます。

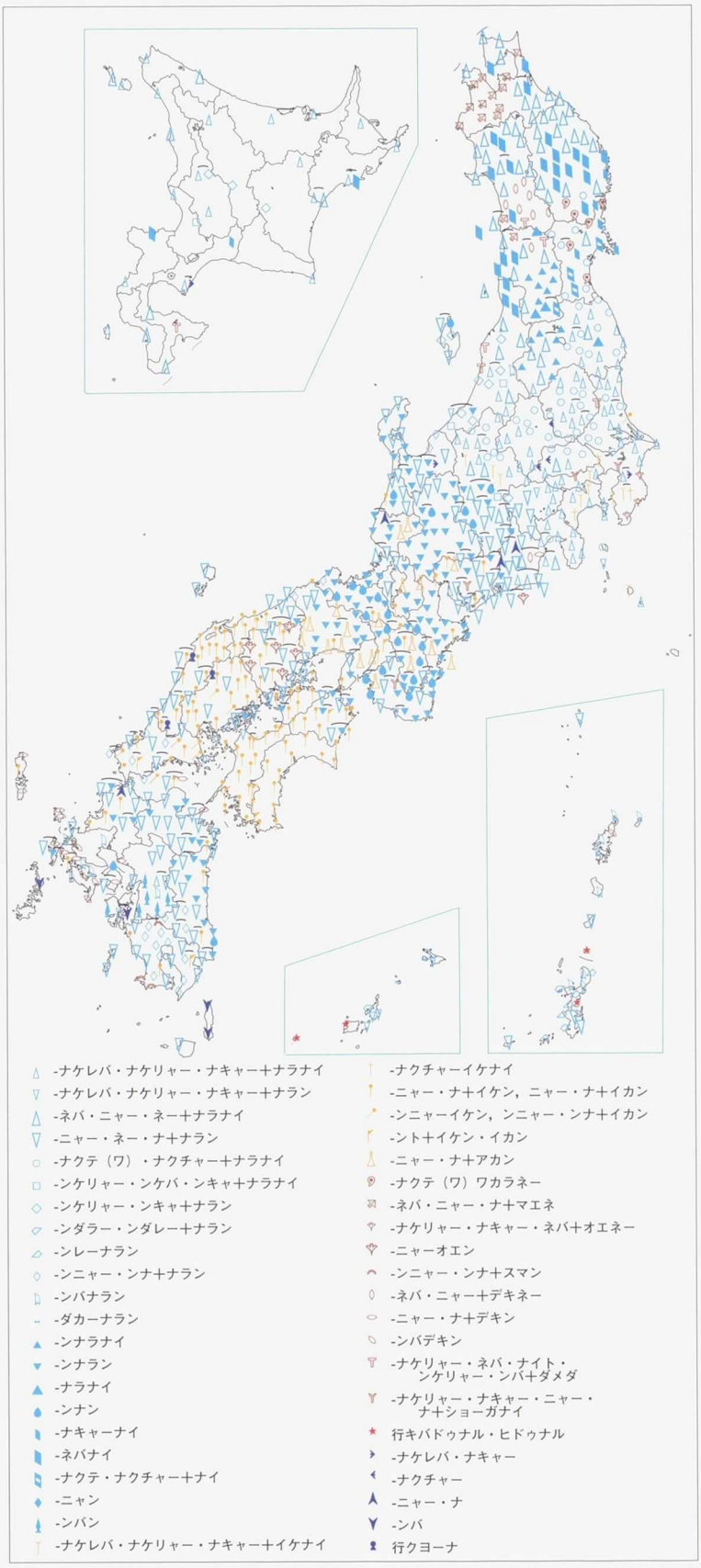
全国的に見られる水色は「～なければならない」の類です。橙色は「～なければいけない」，「～なければあかん」の類で，主に西日本にまとまって見られます。茶色を見ると，「ならない」にあたる青森のマエネ，岩手・宮城のワカラネー，千葉・岡山のオエネー・オエン，秋田・長崎のデキネー・デキンなど，地域特有の表現がわかります。沖縄には，「行けばなる」（赤色）のような「～なければならない」とは異なった表現方法をとる地域も見られます。

なお，この図は地図集に収録した地図を簡略にしたものです。地図集では，さらに詳しい様子が確認できます。

『方言文法全国地図』は第５集で，パソコンによる作図を実現させました。見た目には第４集までとの違いはわかりませんが，作業が大幅にはかどるとともに，将来にわたるデータ利用の幅がひろがりました。この略図もパソコンで作成しています。『方言文法全国地図』に関する情報は，ホームページ（http://www.kokken.go.jp/hogen）から見られます。第４集までのデータはすでに公開していますし，第５集についても準備が整いしだいデータやプログラムを公開する予定です。

第５集は，義務表現のほかにも，「～するな」にあたる禁止表現，「～したい」にあたる希望表現，あいさつ表現など15にわたる分野を扱い，65枚の地図を収めています。さまざまな角度から日本語の方言を見わたし，活用されることを期待します。（８ページに関連記事があります。）

（大西 拓一郎）



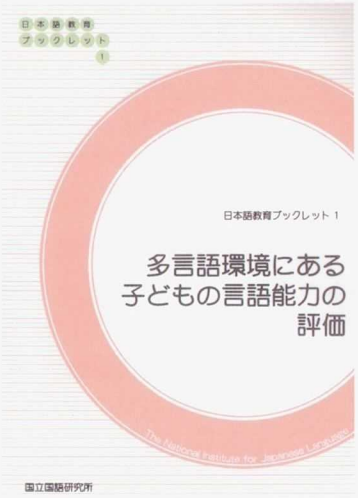
208図　「(行か)なければならない」(義務表現)より

刊行物紹介

『日本語教育ブックレット1　多言語環境にある子どもの言語能力の評価』
『日本語教育ブックレット2　日本語教材と著作権』（ともに2002年3月刊，実費500円）

国立国語研究所では，日本語教育に携わる人材の育成や日本語教育関係者のネットワーク構築を目指して，長期研修，短期研修，遠隔研修を柱に，各種研修を実施しています。その中でも，短期研修では日本語教育の多様化に直面している教師にとって必要と思われるテーマを扱い，知識や情報を提示しつつ，日本語教育におけるさまざまな課題について考えていただく機会を提供しています。

この短期研修の内容をより多くの方々に知っていただき，同時に教師用リソースとして保存・活用していただくため，『日本語教育ブックレット』シリーズは創刊されました。各巻はいずれも60ページ程度とし，簡便さを特徴の一つとしていますが，新しい情報，実践的な情報を盛り込んでいます。日本語教師のみならず，日本語学習者に関わる多くの方々に役立つ内容となっています。



『ブックレット1　多言語環境にある子どもの言語能力の評価』では，学校教育における子どもの能力や到達度などの評価についての考え方の転換や新たな評価手法について述べ，近年，国内外で急激に増加している年少の日本語学習者を対象とした二種類のテスト（OBC，TOAM）の目的，観点等を紹介しました。この二つのテストは年少者のことばの能力評価や習得について，日本語の能力だけを一元的に見ようとするものではなく，母語あるいは第一言語の能力を配慮したものとして，今後の応用が期待されるものです。

また，日本語教育の世界では教師が教材を作成したり，新聞・雑誌・テレビ番組などを活用して授業を行ったりという工夫を日常的に行っています。最近は，インターネットを授業の中に取り入れる機会も増えてきました。テクノロジーの発達のおかげで豊かな教室活動ができるようになった反面，無意識に著作権を侵害したり，侵害されたりしている場合も多いようです。**『ブックレット2　日本語教材と著作権』**では，日本語教師が教材を作成および使用するときに必要と思われる著作権に関する基礎知識を具体的な事例をあげながら紹介しました。

以上の2冊はいずれも，参考となる文献やホームページなどを紹介し，ブックレットを入り口にして，次の段階に進むことができるよう工夫しました。ブックレットという名が示すとおり，小さい本ではありますが，今後も刊行を続け，日本語教育関係者にとって有益な情報を継続的に提供していきたいと考えております。　（金田 智子）

※お問い合わせは下記までお願いします。
国立国語研究所研修事務室
FAX　：03-3900-6559
電子メール：booklet@kokken.go.jp

ことばQ&A

質問　新聞や雑誌，テレビ等で，意味不明のカタカナ語や「IT」や「PC」のようなローマ字の略語が非常に多く使われているように思います。このままでは本来の日本語がなくなってしまうのではないかと心配です。

回答　言語の歴史において，ある言語が別の言語から影響を受けて変化することはよくあることです。しかし，外来語の増加が即その言語の消滅につながるわけではありません。少なくとも，現代日本語における外来語の影響はもっぱら語彙（い）や文字の面に限られており，その限りでは，日本語の仕組みの基本的なところが崩れるということはありません。

有史以来，日本語に最も大きな影響を与えた言語は古代中国語です。文字・語彙・音韻・文法・文体など多岐にわたり，日本語は古代中国語の影響を受けてきました。それでも，現在日常使用されている語における漢語の比率はさほど高くありません。国立国語研究所編『テレビ放送の語彙調査Ⅰ』（1995年）によれば，テレビ放送の音声では，和語が約70％，漢語が約18％，外来語が約4％，混種語が8％となっています（延べ語数の場合）。

また，外来語の使用は，分野によってかなりのかたよりがあります。外来語が多く用いられるのは，医療をはじめとする自然科学系の用語や，美容・ファッション・スポーツなどの言葉です。この場合，外来語は専門用語に近い形で用いられています。

専門用語は，その分野に属する人たちが使う分には便利なものです。特に，これまでなかった新しい事物や概念を言い表す場合には，外来語はたいへん便利です。たとえば，「マウスをクリックしてファイルを開いてください」という表現を外来語抜きでおこなうのは難しいでしょう。

近年，電子情報機器の発達や放送・出版の発展により，社会の情報流通がいっそう活発になり，これまで専門用語として用いられていた外来語が大量に日常生活に入ってきています。その結果，限られた範囲の人にしか分からない語が増えているわけです。

このことは決して「日本語が日本語でなくなる」ということではありませんが，コミュニケーションに支障が生ずる原因になっていることは確かです。これは「生活語」のあり方としてはあまり望ましいとはいえません。やはり，生活語として定着していないものは，分かりやすくするための工夫や配慮が必要でしょう。

（山崎 誠）

開催案内（1,2については8ページに詳しい案内があります。）

1　第12回「ことば」フォーラム「新聞の漢字」
2002年10月25日（金）15:00～17:00
朝日新聞大阪本社　アサコム・サブホール

2　平成14年度国立国語研究所公開研究発表会
「表現法の地理的多様性
—方言地図で見る表現法の世界—」
2002年12月20日（金）13:30～17:00
国立国語研究所講堂

3　平成14年度日本語教育短期研修
第3回「コンピュータによる自由作文の自動評価システム」
2002年12月7日（土）・8日（日）
第4回「論理的文章作成能力の育成に向けて」
2002年12月21日（土）13:00～17:00
いずれも国立国語研究所講堂
問い合わせ：tanken@kokken.go.jp

開催記録

1　平成14年度日本語教育短期研修（第２回）
「対照研究の成果を日本語教育に活かすために」
（2002年7月7日，北海道大学学術交流会館）

2　第11回「ことば」フォーラム in 熊本
「ことば探検・ことば発見」
（2002年8月28日，熊本市国際交流会館）

3　第10回国立国語研究所国際シンポジウム
第1部会「自発音声：データと分析」
（2002年8月29日，国立国語研究所）

4　第10回国立国語研究所国際シンポジウム
第2部会「日本語コミュニケーションの言語問題」
（2002年9月14日，国立国語研究所）

報告　「ことば」フォーラム in 熊本

ことばフォーラム in 熊本【ことば探検・ことば発見】（ＮＨＫ熊本放送局と共催）を，8月28日（水）に熊本市国際交流会館で，216人の参加者を得て開催しました。今回は，中学生・高校生のみなさんにも報告者として参加していただき，会場全体で活発な意見交換が行われました。

《第１部》話しことばの豊かさと円滑なコミュニケーション
★話しことばの豊かさ―暮らしのことば再発見―
★敬語が豊かなコミュニケーション
―熊本の敬意表現調査から―
★外国人とのコミュニケーション
《第２部》『ことばビデオ』を活用した総合的な学習
★ことばビデオ『ことば探検･ことば発見』を活用した小中学校の総合的な学習　（第１会場）
★ことばビデオ『相手を理解する』を活用した高校の総合的な学習　（第２会場）

第１部では，国立国語研究所の調査研究と，ＮＨＫ「ふるさと日本のことば」の成果を提供しながら，会場のみなさんと話し合いました。その様子は，ＮＨＫ地域情報番組「ひのくにプラザ」の拡大版として，当日夕方，総合テレビで放送されました。

第２部では，国立国語研究所の「ことばビデオ」を紹介し，それを活用した総合的な学習の実践報告を二会場で行いました。「ことばビデオ」は，児童・生徒のみなさんのことばへの興味と関心を喚起し，日本語の豊かさや表現の魅力に気づかせることをねらって制作したものです。

第１会場では，八代市立第五中学校３年生４チームのみなさんが，パソコンを使って，『ことば探検・ことば発見』を活用したことばに関する調査研究の報告をしてくださいました。「スポーツのかけ声の種類と意味」チームは，かけ声を使う理由について，「できるだけ短いことばで伝えたいことを簡潔にあらわすため」「勝利を目指すためにやるべきことを確認し，お互いに集中し合うため」と分析しました。「身体の部位」チームは，お年寄りがよく使う身体部位を表す熊本方言について調査し，世代間コミュニケーションを円滑にするために，若い世代の理解を深めることが重要と指摘しました。「接頭語・語尾の言い方」チームは，「つっこける」の「つっ」や，「そぎゃんかい」の「かい」などを使う意図を，「自分の気持ちをよりリアルに伝えたい」「親しみが感じられる」「雰囲気をもりあげる」と分析しました。「熊本民謡『大鞠名所』の歌詞の意味」チームは，運動会の団体演技で用いられる民謡「大鞠名所」の意味とその社会的背景を調査し，干拓工事の苦しい労働における労働歌のはたらきについて分析しました。

パソコンを使って発表する中学生のみなさん（写真提供・八代市立第五中学校）

第２会場では，熊本県立鹿本高校の濱田賢明校長から，同校の先進的な総合学習について紹介があり，生徒のみなさんが，「ことばビデオ」の活用や，「相手を理解する」ことについて意見を発表してくださいました。

二つの会場とも，参加者のみなさんとの活発な討論によって，情報交換・交流を深めることができました。「ことばビデオ」がますます広く活用されることを期待します。

（吉岡 泰夫）

新　　刊

1　**日本語教育ブックレット１・２**
『多言語環境にある子どもの言語能力の評価』
『日本語教材と著作権』
（いずれも2002年3月／B5判横組み59ページ／各500円にて実費配布）

2　**第９回国立国語研究所国際シンポジウム第１部会報告書**
『多言語・多文化共生における言語問題』
（2002年７月／凡人社／B5判横組み127ページ／本体2000円）

3　**全国方言談話データベース**
『日本のふるさとことば集成－第５巻　埼玉・千葉－』（国立国語究所資料集13-5）
（2002年9月／国書刊行会／冊子（A5判横組み262ページ），CD，CD-ROM／本体6800円）

4　**『日本語科学12』**
（2002年10月／国書刊行会／B5判横組み170ページ／本体3000円）

お知らせ

●第12回「ことば」フォーラム（日本新聞協会関西用語懇談会と共催）
テーマ「新聞の漢字」

日　時：2002年10月25日（金）　15:00～17:00
場　所：朝日新聞大阪本社１階　アサコム・サブホール　　※入場無料。手話通訳つき。
内　容：「常用漢字表」と各新聞社の漢字表は，どのような経緯や目的で作られているか，社会に大きな影響力をもつ新聞の漢字使用の実態とは，そして漢字の問題の調べ方や向き合い方について，考えます。
題目・発表者：「漢字表ってなんだ？」　小椋 秀樹（国立国語研究所）
〔協力：朝日新聞大阪本社校閲部次長　大堀 泉氏〕
「新聞の漢字を調べる」　笹原 宏之（国立国語研究所）
「漢字の質問あれこれ」　山田 貞雄（国立国語研究所）
〔協力：読売テレビアナウンサー　道浦 俊彦氏〕
申し込み方法：参加希望の方は，①住所，②氏名，③（もしあれば）漢字についての質問を記入の上，往復はがきか電子メール（forum@kokken.go.jp）でお申し込みください。（10月21日消印有効）
〒115-8620　東京都北区西が丘3-9-14　独立行政法人国立国語研究所　大阪フォーラム係
問い合わせ先：電話 03-3900-3111　電子メール forum@kokken.go.jp

●国立国語研究所公開研究発表会
テーマ「表現法の地理的多様性―方言地図で見る表現法の世界―」

日　時：2002年12月20日（金）　13:30～17:00
場　所：国立国語研究所講堂（１号館５階）
内　容：国立国語研究所編『方言文法全国地図』第４・５集（表現法編Ⅰ・Ⅱ）を材料として，日本語方言の諸表現に関する研究成果を発表します。（４ページに関連記事があります。）
題目・発表者：「『方言文法全国地図』と表現法」　大西 拓一郎（国立国語研究所）
「不定・疑問を表す助辞の分布」　小西 いずみ（東京都立大学・国立国語研究所）
「推量表現の分布と地方誌情報の連結」　吉田 雅子　（国立国語研究所）
「命令表現の分布と場面差」　三井 はるみ（国立国語研究所）
「方言表現法の分布類型と分布形成」　大西 拓一郎（国立国語研究所）
問い合わせ先：田中 牧郎　電話 03-5993-7635　電子メール mtanaka@kokken.go.jp

●「こちら国語研究所」（NHKラジオ第２放送「NHKアナウンサーの はなす きく よむ」）
NHKラジオ第２放送「NHKアナウンサーの はなす きく よむ」の「こちら国語研究所」（年４回）では，国立国語研究所の研究員が言葉の様々なトピックについて解説をおこなっています。今年度後半の放送予定は次のとおりです。（放送は第５日曜午後6:20～6:35。再放送は同じ週の水曜午前1:20～1:35と翌週日曜午前7:10～7:25）

・12月29日（再放送1月1日・5日）
「『…みたいだ』の誕生と定着～コーパスで言葉の歴史を調べる～」（田中 牧郎）
・3月30日（再放送4月2日・6日）
「あいづちを打つタイミング」（小磯 花絵）

平成13年度作成の「ことばビデオ」シリーズ１『相手を理解する』が，財団法人日本視聴覚教育協会主催（文部科学省ほか後援）の「2002年優秀映像教材選奨」の審査で，学校教育部門（高等学校向け）の「優秀賞」を受賞するとともに，文部科学省より「文部科学省特別選定」との評価を受けました。